

学校経営のポイント

常用漢字の“196字追加”と教育上の扱い

若井 彌一

まだ最終的に確定したわけではないのに取り上げるのは、適切でないかもしれないと思いつつも、やはり、この段階で一度取り上げておきたい。

初めての改定で5年がかりの検討

常用漢字現行 1945 字に、新たに 196 字を追加する案が、文化審議会国語分科会で承認された（本年 5 月 19 日）。現行の 1945 字のうち、あまり使用されていないと判断された 5 字（勺、錘、銚、脹、匆）は、削除の対象となった。

5年がかりの検討作業ということで、検討作業であれこれの心労を負った国語分科会の委員諸氏は、「やれやれ、これで一区切り」という心境であろうか。事情（苦労）を知らない人たちの多くは、反対に、「196字を追加し、5字を削除するだけのことで、なんでこんなに時間がかかったのか？」という印象を抱いたことであろう。

筆者も事情（苦労）を知らないひとりなので、失礼があったらお許しを願いたい。

常用漢字が、それまでの当用漢字 1850 字に代わるものとして確定（閣議決定）したのは、昭和 56 年のことであった。当用漢字は、「日常使用される漢字の範囲を示すものとして、昭和 21 年に国語審議会の答申を受けて定められた内閣告示『当用漢字表』に記載されていた 1850 字の漢字」（『法律用語辞典』内閣法制局法令用語研究会編、有斐閣、999 頁）と説明されている。

程度はともかく、公の審議会により公認された漢字の数を増加することに疑問を感じ、批判的な見解をもっている人々にとっては、今回の 196 字の新規追加は多すぎるし、子どもの学習負担を重くすることになるのでは、と懸念されるかもしれない。

追加された漢字のなかには、曇、鬱、顎、稽、隙、蹴、遡、遜、戴、填、剥、蔽、璃、籠など、比較的漢字の画数が多く、書き順（筆順）もイメージしにくいものが、少数ながら含まれている。

しかし、使用例として示されている語彙、憂鬱、顎関節、稽古、隙間、一蹴、遡上、謙遜、戴冠、補填、剥製、隠蔽、浄瑠璃、籠城などの意味を説明し、漢字の書き順（筆順）をきちんと理解できるように指導してやるならば、それほど難題ではなからう。

検討が必要な“学校での指導上の扱い”

とはいうものの、追加された漢字のすべてを手書きできるようになるには、少々の根気が必要かもしれない。この点については、気配りのある解説があり、「漢字表のすべての漢字を手書きできる必要はない」という。

また、「学校教育における漢字指導は、別途の教育上の適切な措置にゆだねる」とも述べられている。

これら 2 つの事項が、どのように検討され、結論づけられていくか。学校教育関係者にとっては気にかかることである。

196 字の新たな追加に 5 年もの年月をかけてきた。学校教育とのかかわりについても、十分検討を加え、指導上の混乱が発生しないようにしてほしいと思うものである。

曖昧な提言で、教育上、どう扱ったらよいか不明確で、現場が混乱するような事態は避けなくてはならない。

（わかい・やいち = 上越教育大学長）

本紙は <http://www.kyouiku-kaihatu.co.jp> でも掲載

●5月19日発売！ 教師の「学級経営力」を高める！ 高階玲治 [編] B5判 / 186頁 / 定価 2,500円

『新学校経営相談 12ヵ月 No.5 発達に応じた学年・学級経営』

『スーパー教職大学院発進！』上越教育大学 [編] A5判 280頁・定価 2,520円